

「ムスリマであること」を保とうとする留学生の日常実践

- ライフストーリー法による新たな言説の構築と教育への示唆に向けて -

中川 康弘

キーワード：ムスリマ留学生、日常実践、ライフストーリー・インタビュー、教育環境の設定

はじめに

2016年1月4日、ある大手新聞社の朝刊に掲載された記事が誤報だとして、取材対象の日本人ムスリマ(女性のイスラーム教徒)が、当日の朝、フェイスブックに反論文を投稿、後日、同新聞社と記者に謝罪を求めた⁽¹⁾。問題は、イスラーム教徒としての生きづらさが強調され、取材時の回答が歪曲されていた点にあるという。謝罪を求めた女性は、自分と異なる人物像が独り歩きすることの怖さを感じたようだ。取材相手の語りの意味を十分に吟味しなかった記者には、日本社会の偏見にムスリマが苦悩し、ゆえに寛容な社会の構築が求められるとする「予定調和のストーリー」があまりにも強固にできあがっていたのかもしれない。

近年、日本社会において、礼拝、ラマダーン、ハラール等、イスラームの宗教的行為が人々に広く認知されつつある。しかし、その認知度もある一定のレベルに留まるのみで、前述の記事内容も日本人ムスリマ当事者からの訴えがなければ、違和感なく納得していた読者も多かったのではないだろうか。そして、「差異」を固定化させ、一定の理解に留めてしまう思考経路は、私を含めてムスリマ留学生と接する機会の多い日本語教育・留学生教育関係者も否定できず、それゆえ、一般化されたムスリマではなく「個人」に着目し、そこから教育の方向性を検討する必要があるように思われる。

2. ムスリマ留学生にかかる先行研究の成果と課題

まず、留学生教育現場での宗教的多様性への対応を報告したものについて触れたい。岸田(2011)は、国・公・私立大学143校を対象に、ムスリマ留学生の受け入れ体制に関する質問紙調査と、そのうち6校にインタビュー調査を実施し、予算や施設不足、宗教的公平さといった面を課題としつつも、多くの大学が宗教的配慮の必要性を感じているという点に触れ、その取り組みの進展の可能性を示唆した。田中・ストラーム(2013)は、ムスリマ留学生が21か国230名以上在籍する所

属大学での多文化環境整備の取り組みを記している。そこでは、学内の日本人に礼拝する姿が奇異に映っていないか、食堂が混雑する時間帯にハラールフードかどうかを尋ねてもよいか等、ムスリマ留学生が周囲に対して普段から感じている懸念を報告した。そして食堂の生協関係者への働きかけ、非ムスリマ学生への啓発を通じて、相互理解のための学生、教職員との連携を密にした学内の取り組みを記し、「多文化協働」という考え方の重要性を提示している。

次に、留学生の生活状況に関して、市嶋(2013)は、自ら所属する大学の3か国6名のムスリマ留学生に聞き取り調査を行い、コミュニティの実態を調査した。そして留学生が日本においてハラールフード入手の困難さや周囲の日本人の宗教的多様性への無理解に遭遇していることを示すと同時に、礼拝場所での情報交換や車の共同購入、フェイスブック等によってムスリマ同士のネットワークを強化し、コミュニティを維持、拡張させることで日本人コミュニティに関わっていくとする姿勢に触れている。また中野・奥西・田中(2015)は、9か国21名のムスリマ留学生に「日本での生活上の不便さ」「やりにくさや戸惑い」というトピックに特化した聞き取り結果を考察した。データをKJ法により分類した結果、日本での行動上の制約として①ハラールフードに代表される飲食上の制限、②礼拝場所や礼拝時間の確保、③性描写にかかるマスメディアの影響、④礼拝施設の男女の区分のなさを問題として挙げ、そこから信仰に基づく価値観や行動についてホスト側である日本人側の理解や配慮が重要だとした。

先行研究、殊に上記の市嶋(2013)、中野他(2015)は、これまで明確に論じられなかったムスリマ留学生の生活上の困難さと葛藤を浮き彫りにしたものであり、その支援としての学内の取り組みの必要性を示唆した点で重要である。しかし、両者ともイスラーム教の宗教的義務の実践についての見解は政府、宗派、個人によって異なるとしつつも、それらは「ムスリマ留学生」とい

うカテゴリー枠に収めてしまっているように思われる。自らの研究を制度改善に向けたアクションリサーチと位置付ける市嶋(2013)では、調査協力者6名がどう留学生生活を送っているのかがあまり見えず、中野他(2015)も、イスラーム教の受容姿勢が出身国によって異なるとしつつも、個々の異なりが留学生生活の文脈にどう関係しているのかについての言及はない。つまり、イスラーム教の宗教的実践は個人によって異なることを前提とし、読み手の理解の単純化を懸念しつつも、「ムスリム留学生」として総括的に論じられ、それが十分に払しょくされていると言いがたい点が課題であると言える。またそれは、ムスリム留学生に関わる相手である「日本人」という存在を、やはり「顔」の見えない存在として一括りにして論じていることにも当てはまる。なお、これらの以前にも、ムスリム留学生3名が語る自己イメージから異質性を排除する場の権力の問題を指摘した下峠(2003)がある。だが、検討の矛先が教育現場ではなく、広く不特定多数を対象にした日本社会に向けられているため、結果的に「ムスリム」対「日本社会」の二元論に陥り、3名の意見が一緒にたにされている感は否めない。

さらに、研究姿勢として先行研究全般に問わなければならないのは、日本に暮らすムスリム留学生には宗教的背景がもたらすストレスや緊張が「問題の前提」としてあり、その内実を探り、方策を考えるという調査者側の論じ方と、留学生の多様化に伴う獲得競争の激化という文脈において、より多くのムスリム留学生を惹き付けるために学内に礼拝場所やハラールフードを用意すればよしとする、受け入れ側の支援姿勢についての言及のなさである。確かに、宗教的配慮はムスリム留学生からのニーズによるものでもあるゆえ、日本社会の受け入れ姿勢を問うたものとして先行研究の果たす役割は大きい。しかし、「ムスリム留学生＝日本での生活が困難」という調査者のまなざしは、礼拝場所やハラールフードを提供すれば留学生が集まるという単純な発想を受け入れ側に抱かせ、そこに非ムスリムとの接触が念頭に置かれていない点で、受け入れ側の無自覚さによる「配慮という名の下の排除」をもたらす可能性もある。また、そうした配慮は、小杉(2017)も指摘するように、ムスリム留学生の日本語運用力や自炊能力等の困難さを宗教上の問題に換え、本人の自律性をも脆弱化させかねない。何より、宗教的カテゴリーに括り課題を強調する研究姿勢は、多様な背景を持つ個々のムスリム留学生が周囲とどう関係を築いている

のか、個人の多様な日常の実践知を見失うことになる。それは結果的に、イスラームを教育現場でどう引き受けるかを考える機会を逸することにもつながるのではないだろうか。

よって、この分野の研究を発展的に引き続くには、「ムスリム」を個人のアイデンティティの一要素であるという意識を常に置きつつ、ムスリム留学生個人の生活実態に着目した調査をボトムアップ的に行い、そこから日本語教育および留学生教育の在り方を検討する視点が必要だと考える。

3. 本研究の目的

そこで本研究では、後述する1名のムスリム留学生に着目し、アイデンティティの一要素である「ムスリムであること」を、彼女がどのように保ち、周囲と関係を築いているのか、日本での留学生生活を通じた日常の実践を描きながら、その実態を探っていくことを目的とする。無論、1名の事例では教育実践に言及するにも限界がある。よって多様な背景を持つ学習者を対象とする日本語教育・留学生教育の現場への示唆に向かいつつ、ムスリム留学生をめぐる言説への新しいストーリーを導き出すことに主眼を置いた研究として、本稿を位置付ける。

4. 個人の語りに着目した方法論と分析枠組み

日本語教育研究では、急激なグローバル化による学習者の多様化に伴い、2000年代以降、質的研究、殊にライフストーリー研究が盛んに行われてきた(三代2016)。その研究成果の多くは、国籍や民族、あるいは特定の母語話者集団といった典型的なモデルで対象を捉えず、個人のアイデンティティに着目したものである。三代は「社会に埋め込まれた個々の学びの意味を考えるという視座が生まれた」(三代2016, 8)ことに、日本語教育学とライフストーリー研究との親和性を見出しているが、それはムスリム留学生個人に着目した本研究においても共通するところが少なくないと考える。

よって本研究では、社会、文化は対話によって構築されるという観点から語り手の主観的世界を解釈することに重きを置く「対話的構築主義」を唱えた社会学者の桜井厚(2002)に倣い、語り手と聞き手の相互行為を通じて共同構築されるという見方に立脚するライフストーリー・インタビューを用いる。

語りをインタビュープロセスから独立させたテクス

トとして解釈できると仮定する、従来の調査手続きに疑問を投げかけた桜井は、「何が(What?)」ではなく「いかに(How?)」語られたかを重視する。そして語り手と聞き手の相互行為によって構成されたデータを、「あのとき、あそこ」の世界に帰属する語り手の「物語世界」と、「いま、ここ」の世界に帰属する「メタコミュニケーションの次元の語り」である「ストーリー領域」という二つの位相を見ていくことの重要性を説いた(桜井2002, 2012)。なぜ、聞き手との相互行為が重要なのか。桜井は、「調査インタビューでは、インタビュアーと語り手の言語的相互行為によってライフストーリーが語られ、そのストーリーをとおして自己や現実が構築される」(桜井2002, 61) からだと述べる。語り手は語る際、聞き手の存在を意識して語る。それゆえ、語り手の語るストーリーは語り手にとって聞き手が何者であるかが重要となるのである。

そうした相互行為に着目することで、桜井はまた、社会学者の西倉実季との対話(桜井・西倉2017)において、一般的な語り、すなわち、あるコミュニティで流通しているモデルストーリーに対して「差異性を含み込んだ上で、新たなストーリーをつくり出さないといけない」(桜井・西倉2017, 80) とし、差異性を投げかけ、時代や状況の変化に応じて変わっていく側面を擲き出すことを重視する。これらの主張を踏まえると、1名のムスリマ留学生に着目しながら、先行研究を含めて形成されつつあるムスリマ留学生をめぐる言説に、もう一つの新しいストーリーを探ることを目指す本研究では、この桜井に主張に依拠して調査を行うのが妥当であると改めて考える。

なお、桜井は、ある枠組みを持ってその語りを期待する調査者の姿勢、および公的なストーリーを語ろうとする語り手の姿勢を「構え(志向性)」(桜井2002, 167)と呼んでいる。そしてこの「構え」を持つがゆえに、特に聞き手である調査者には、語り手との間にある権力の不均衡を認め、その上で自らがどのような構えをもって聞き取っているか自覚的になることが求められるとした。非ムスリマであり、教える側でもあった調査者の私が、一人のムスリマ留学生の語りを誘い、一方的に解釈しようとすることは、調査プロセスに潜む暴力性から逃れられない。たとえ問題の良き理解者として寄り添い、信頼関係を築こうと思っても、それは私の思い入れが強いだけかもしれないからである。調査協力者との信頼関係、すなわちラポール形成の明示化も、社会学者の岸政彦によって「構造的な暴力」を「技術的に回

避しようとしているようにみえます」(岸2016, 164)と指摘されている。調査にあたり、私はその点を自覚しつつ、調査開始の段階から終了後もイスラーム思想や文化について学ぶ姿勢を心掛け、日本で学ぶムスリマ留学生に貢献したいという研究動機を伝えた上で調査に臨んだことを記しておきたい。

5. 調査の概要

協力者は、一時期、私の担当する日本語関連科目の受講生だったインドネシア出身ラトナさん(仮名)。調査はラトナさんが大学2年生の時の6月に約2時間、その後補足として12月に約1時間行われた。録音した文字化資料を主な分析データとし、併せて調査時のメモと後のメールも参照した。なお本稿には、1名の語りを扱う研究の性質上、個人が特定されないように配慮した部分もあることを断っておく。

6. 調査結果

以下、ラトナさんへのライフストーリー・インタビューデータから、「ムスリマであること」をどう維持、確認しているのか、トピックごとに見ていく。データ表記について、私を*、ラトナさんをRで表した。表記記号は桜井(2002, 177-180)に倣い、同時発話(// //)、発話交替時の割り込み(=)、上昇調(?), 沈黙1秒につき(・), 笑いは(笑)とし、特に着目した語りは下線を引いた。また文中のデータ部分は「」内に斜体を用いて記した。

6.1 ムスリムの友人との価値観の相違がもたらした「ムスリマであること」の再確認の機会

ラトナさんは、2010年代の中盤にインドネシアの一般高校を卒業した⁹⁾。高校の外国語科目には英語、ドイツ語、日本語があり、ラトナさんは英語を選択していたという。だが高校3年生になったばかりの時、日本のアニメが好きな友人の誘いを受け、放課後に生徒有志で運営している日本語サークルで日本語の勉強を始める。次第に日本への興味が増し、高校の近くの日本語センターで日本語習得に励んでいた。その頃には、日本語サークルに誘った友人以上に日本への興味を持つようになったという。日本での知人が皆無の状況であったラトナさんだが、そこは「私の性格は、とても積極的。若い時にしかできないことをやりたかった」という気持ちで、大学進学のための来日を決めたそうだ。留学サービスの会社を高校の先生に紹介され、卒業後来日、友人

2名と一緒に日本語学校に入学する。

当時、日本語学校の留学生の多くは中国出身者であり、ラトナさんを含む3名は初めてのインドネシア出身者だった。それもあって、「日本語学校の先生たちはとても親切。空いてる教室をお祈りに使ってくれとか、授業が終わってから一緒にスーパーに行ってこれは豚肉ないとか、課外授業でBBQした時に豚肉使わないとかしてくれ」という。よって日本語の勉強以外で思い出すのは、宗教的行為に理解のあった日本語の先生との関係である。そのおかげで、来日当初、ラタナさんは物質、生活環境の面での困難さを感じることはあまりなかったようだ。

ただし、一緒にインドネシアから来日した友人2名とは、日本語学校に入学後しばらくして、宗教的行為に対する価値観の違いから距離を置くようになる。

<データ1>友人との差異化によってなされる「ムスリマであること」への再帰的な確認

*：一緒に日本に来た2人はどうしてるの？

R：1人は、別の大学に行ってます。あと1名は、たぶんまだ日本語学校かも。

*：そうなんだ。え、じゃ時々会ったりするの？

R：いや日本に来てからすぐ、2人とはちょっと違う感じになって。

*：違う？(・)ん？けんか？仲悪くなっちゃったとか？

R：2人は日本来てちょっと、お酒とか豚肉//*：ああ//食べたりして。でも私はそうなりたくないです。

*：あ、じゃラトナさんはしっかり守っているわけだ。

R：最初守りましたが(・)、私はその(・)重くないイスラームなので。最近豚とお酒以外は気になりません。でも本当は今からまたルールを守らなければなりません。だからできるだけ頑張ります。

*：ああ、はいはい。

まず、「実は」からはじまる「物語世界」で、友人と距離を置くようになった原因が語られている。戒律を軽んじる友人の行為は、ラトナさんにとって我慢のならないことであった。同時に「私はそうなりたくない」という語りから、友人の行為が自らの信仰心を省みる機会になっていたこともうかがえる。

次に、「ストーリー領域」に着目する。聞き手である私は、ラトナさんを友人と比較し「ラトナさんはしっかり守っているわけだ」と確認するが、そこではラトナさんも戒律への意識が薄れつつあることが語られる。だ

に興味深いのは、その直後、「今からまたルールを守らなければなりません。だからできるだけ頑張ります」と、私に向けて信仰への決意を伝えた点である。「宣言」とも思えるこのラトナさんの語りには、戒律を軽んじる友人と同等であると解釈されたくないという思いを伝えると同時に、私という「他者」を通じて、再帰的に「ムスリマであること」を保とうとする姿勢が確認できる。

友人2人と距離を置くようになったラトナさんであったが、日本でムスリムのネットワークがない状況は変わらない。日本語学校では先生たちの親切心に触れていたが、それでもやはり、ラマダーンの時期になると、「大家族で集まって、一緒に食事して、夜お祈りできないので、一日中何回も涙が出ました」と孤独感に陥ったこともあったようだ。

そんなラトナさんも、現在の大学に入学を果たす。入学時、ムスリマはラトナさんのみであった。中国出身の留学生が圧倒的に多く、当初は不安を感じたそうだが、すぐに解消される。理由は、学内で留学生支援をしていた先輩の京香さん(仮名)という日本人の友人ができたからである。

6.2 日本人の親友を通じてなされるムスリマであることの確認

次のデータ2は、インタビュー開始直後、京香さんとの関係が語られたものである。ここでは、イスラームの良き理解者である京香さんによって、ムスリマであることを気づかされる体験が語られている。

<データ2>「ムスリマであること」を気づかされる「京香さん」の存在

*：えっと、仲いい友達とかできた？

R：はい。一番仲いいのは、京香とかか＝

*：＝ああ京香さん、結構留学生支援してるもんね//R：はい//彼女は、京香さんって、ラトナさんがムスリマであることに気を遣ったりすることとかあるのかな？

R：はい。京香は、最初はどうしたらいいか思ったみたいですけど、すぐ仲良し//*：うん//になって、それから例えば、一緒に買い物に行った時、「お祈りは？」とか逆に聞かれちゃって(笑)。こっちは「ああそうか時間だ」とか＝

*：＝逆にRさんが思い出す//R：そう//んだ。

R：そうです。あとこの間京香の家に泊まりに行ったんで//*：へえ//ですけど、朝起きた後で「お祈りは？」

とか逆に聞かれて//*: ああ(笑) // 「食べ物?」
とか。だから日本人の友達、まあ京香ですけど、私
を理解しているので嫌な経験はありません。

*: じゃあ、もう学校に一人でいるっていうのは、どう
//R: 全然ないです//か、ああそうなんだね。

このデータでは、ラトナさんが、友人となった京香さん
に宗教的行為を促される様子が語られている。ラト
ナさんは、「逆に聞かれちゃって」と照れ笑いをしつつ
も、その気遣いに感謝し、京香さんを信頼する心境がう
かがえる。イスラームの戒律を軽んじた同国の友人と
は距離を置くようになったが、大学に入り、京香さん
という日本人の良き理解者と出会ったことは、ラトナ
さんにとっては肩肘張らずに「ムスリマであること」が
維持できる転機となっただろう。インタビューデータ
を見ても、日本語の運用に流暢さがみられることから、
この関係性は日本語能力の向上にもつながっていると思
われる。またそれは、京香さん自身にとっても、イスラ
ームへの理解を深めるきっかけになっているに違いな
い。

なお入学直後、ラトナさんは中国語話者ばかりで寂
しいと私に訴えに来たことがある。学校に一人でいる
ことはないか聞いた際、即座に「全然ないです」と語
っていることから、京香さんの存在はラトナさんの留学
生活を充実させていったと思われるが、他の学生との
関係に進展はあったのだろうか。次項では、京香さん
以外との関係、特に他国の留学生とのネットワークにつ
いて語られたデータを検討する。

6.3 ネットワークの広がりをもつ阻む要因としての礼拝 場所の存在

田中・ストラーム (2013) では、ムスリム留学生は
礼拝について「周りに迷惑をかけたり不安を与えたり
したくないという強い希望がある」(田中・ストラーム
2013, 2) と報告されている。大学には、学生が行き来
する棟の一教室が礼拝場所として設置され、ラトナ
さんもそこを利用しているそうだが、調査時に前述の先
行研究を念頭に置いていた私は、ラトナさんも日本人
学生や他の留学生の視線が心理的負担になり、礼拝し
にくさを感じているのではないかという思いを抱いて
いた。また一方で、何人かの非ムスリムの学生から、そ
の場所の内部はどうなっているかと問われたこともあ
る。そうした事情もあり、私には、インタビュー以前に、
いわば調査者としての「構え」が存在していたのである。

次に示すデータ3は、「構え」を伴いながら聞き取りを
進める私とラトナさんとの間に齟齬が見られたもので
ある。しかし、その齟齬の隙間からは、ラトナさんがネ
ットワークの広がりを阻む要因が確認された。

<データ3> 礼拝場所の設置環境が「ムスリマである
こと」にもたらす影響

*: お祈りの部屋あるでしょう? よく行く?

R: はい、いつも。とてもありがたいです。

*: あの(・)一応、教室の隣にあるし、留学生とかに
聞かれるんだよね。何してますかとか。

R: ああ。でも大丈夫、ありがたいです。

*: いやそうじゃなくて、他の留学生は、どうかなあ?
って。

R: うーん私は別に気にしません。あるのはほんと、あ
りがたいです。

*: そっか。(・) うん。じゃ、他の日本人とか、中
国ベトナムの留学生で仲良くなった人は?

R: 日本人はやっぱ京香が一番//*: うん//です。留学生
は会えば話すけど、日本人ほど興味は(・)。

*: あ、ないん//R: はい//だ。そっか。じゃあ、だれか
とお祈りとかいーラールの話したことある?

R: いや、ないです。他の人も興味はあると思い//*:
うん//ますけど、でも説明してもわかるかどうか。

*: ああ。まあ、みんな日本語苦労してるからなあ、う
ん。

R: あ、私の日本語が。

*: えっ、そっか。

R: 日本語でちゃんと説明できれば、わかると思います
けど。

私が「構え」を潜ませつつ、「留学生とかに聞かれる
んだよね。何してますかとか」と問いかけたところ、ラ
トナさんは礼拝場所の設置を、ただ「ありがたい」と言
うに留まる。それでも、日本人学生や留学生からのまな
ざしをどう思っているのかラトナさんの口から確認し
たいという思いが強いため、私は「いやそうじゃなくて」
と語りを遮ろうとする。

桜井 (2002) は、語りを誘う調査者の聞き方を「他
者に自己と自分の周りの世界を<語らせる行為>の実
践」(桜井 2002, 264) と述べている。実はこうした行
為は、初級項目の導入時や上級クラスでのディスカッ
ション時に学習者に発話を促す、日本語教師の教授技
術に通じるものでもある。だが、語りの内容を自己の興

味に向かせるように、半ば無理やり口を開かせようとしたここでの私の問いかけ方は、教授技術としては失敗であり、またく語らせる行為とも呼べないであろう。結果として、ラトナさんも「ありがたい」を3度繰り返すに留まり、誘いに乗ってくることはなかった。その後、京香さん以外に仲良くなった人はいないと述べ、留学生には興味がないという語りが続いていく。

しかし、宗教的行為や礼拝場所の存在を他人にどう思われようが「気にしません」と述べていたラトナさんであったが、やがて「他の人も興味はあるとは思いますが」という「他者を気にする」語りが確認される。インタビュー途中においてはそのことを指摘する間もなく、後に続く日本語能力への不安という語りの流れにいったが、トランスクリプトを振り返る過程で、私には、他者への関心のなさが確認できる一方で、自らの宗教的行為に対しては他者がどう思っているのかというまなざしへの関心も少なからず存在しているという、2つの相反する意識がラトナさんに内在していることが読み取れたのである。そして他の留学生との交流が希薄な原因として語られた、自身の日本語能力に対する不安については、「えっ、そっちな」と驚く私との認識に「ずれ」が見られるほど強く抱いていたこともわかった。よって、このデータから、礼拝部屋を設置するだけの配慮は、異質な他者とのインターアクションの機会を遮り、ネットワークの広がりから得られる学びの可能性を摘んでしまうことが確認できる。6.1で「性格は積極的だった」と述べていたラトナさんも、ここでは、ネットワークを限定し他者と距離を置こうとしていた。これも「ムスリムであること」を保とうとする姿勢だと言えるが、見方を変えれば、礼拝場所の設置環境によりもたらされた部分が大きいとも考えられるのではないだろうか。

6.4 小学校での課外活動で表れたムスリムとしての立ち位置

前節では、礼拝場所の設置環境により、日本人学生や他国の留学生との交流が必然的に希薄になっていた事例を記したが、逆にインターアクションの相手が直接ラトナさんのアイデンティティに抵触してきた場合、どのように交渉するのだろうか。以下、課外活動で小学校を訪問したという語りを記す。

<データ4>会話の相手をカテゴリー化することにより「ムスリムであること」を保つ姿勢

*:前に、何かで小学生と交流したって言ってたよね。国の紹介とかしたんだっけ。どうだった？

R:インドネシアを紹介して楽しかったです。でもイスラームこわーい//*:ああ//言われて(笑)。

*:ああ、ヒジャーブ(スカーフ)は、かぶってた？

R:もちろんかぶってました。

*:そっか。それ言われて、どう思った？

R:小学生だし難しい話は分からない、しょうがないです。私も日本語自信ないし。

*:うーん(・)しょうがないでいいのかなあ(笑)。ちょっと嫌でしょう？小学生でも。

R:まあ、でも前も、日本語学校の時でもあったし、こういうことは慣れてます。

*:でも、今は日本に230万人ぐらい外国人が住んでるし、小学校でも多文化教育は必要だと言われているから、ちゃんと教えてほしいよね。子供には。

R:(・・)そうですね。

データ4は、ムスリムとしてのアイデンティティを揺るがす言動を向けられた出来事が語られたものである。「イスラームこわーい」と話す小学生に対し、ラトナさんは否定も注意もせず、「難しい話は分からない、しょうがない」という態度をとっていた。日本語能力の自信のなさもあるかもしれないが、加害性が潜む言動に対する「寛容さ」は、相手を「小学生」というカテゴリー一枠に括ることで維持しているとみることでもでき、これもまた「ムスリムであること」を保とうとする姿勢だと言えるだろう。

ところで、こうしたラトナさんに対し、私は「しょうがないでいいのかなあ」と本心を聞き出そうと誘導するが、ラトナさんは「慣れてます」とかわす。しかし、小学校での異文化理解の扱い方に対する同意を再度投げかけると、ラトナさんは沈黙を経て「そうですね」とのみ答えるに至った。初等教育における異文化理解の必要性に関して問題を共有しようとする「構え」を持った私と、当事者であるラトナさんとの間に温度差が見える。

しかし、そんなラトナさんにも、日本語能力の自信のなさを乗り越え、「ムスリムであること」を表面に出す場合がある。それが、次に示す、授業の様子について聞いた時の語りである。

6.5 イスラームについての理解を教師に促す姿勢

次のデータ5では、イスラームについて誤った情報を教えた教師に訂正を促したことが語られる。

<データ5>言語行動で示す「ムスリマであること」

*: 専門科目とか、最近、授業はどう？先生、ラトナさんのことよく理解してくれる？

R: はい特に問題ありません。でもこの間の授業で、イスラームについて違う情報を教えていたので、誤解してるって先生に言ったことあります。

*: えっ、どんな科目？

R: いやちょっと（・）覚えてないですけど、キリスト教とイスラーム教の関係とかムハンマドについて //*: ああ//とか。違うって思って、他の学生が覚えると困るから、「違うと思うのでよく知らないのであれば教えないほうがいいです」って、コメントシートに書きました（笑）。

*: すごーい。きちんと説明した//R: はい//んだ。で先生なんか言ってきた？

R: 後で「これから色々教えてね」って言ってきて。だから今も大学で会うと話しますね。

*: そうなんだ。

授業での様子や教員のラトナさんへの配慮について問いかけると、ラトナさんは「特に問題ありません」と答える。しかしその直後、授業中、ある教師に訂正を促したエピソードが語られる。これまでは、自らの日本語能力への自信のなさや他者のカテゴリー化等によりムスリマであることを保とうとしていたラトナさんだが、語りからは、他の学生の誤解を避けるために日本語を用いて教師に訴える積極的な姿勢が確認された。そしてここには、もはや自らの日本語の拙劣さに臆する姿は存在しない。さらに教師に対する直接的な行動は、両者の関係の深まりの可能性も見出される。その様子は、「これから色々教えてね」と言われたという語りや、私が反射的に科目名を問い出そうとしても「いやちょっと（・）覚えてないんですけど」と即答しなかったラトナさんの当該教師に対する配慮からもうかがえる。

6.6 自らの行動を通じて潜在的に示す周囲へのイスラーム理解促進の働きかけ

ラトナさんは、周囲にイスラームへの理解を深めてほしいという気持ちを常に胸に宿している。そうした機微が垣間見えた語りを、本稿の最後のデータとして示す。

<データ6>自身の日常行動に潜ませる、周囲へのイスラームに対する理解

R: 授業とかで、いつも誰かに会うと、私はイスラーム教ですから、やっぱりよく聞かれました。

*: ああ（・） そうだろうね。

R: 本当はいつも聞かれる時とても不安//*: うん//です。正しく伝えないとだめだと思って。実は先生にも//

: ん?//そうです。このインタビューとかも=: =ああ。そっか（笑）。

R: 宗教の話は敏感な話ですので、間違えないようにいつも気になってます。でもイスラームのイメージはあまり良くないから、きちんと説明しないといけません。よく考えてから答えよう//*: うん//と。でもよく知らない学生とか先生には、日本語も上手ではありませんから気を遣います。

*: うーんそれはどうかなあ。さっきコメントシートで間違ってるって書いてたんじゃない？

R: はい。違う時は下手でも言いますが、でも、私が間違えそうなら、何も言わないほうがいいと思っています。その気持ちが強いわ//*: ああ//です。説明しなくても、正しい日常行動でわかりますので、実は毎日、変に思われないようにいつも思って行動してます。

*: そうか。そういうふう考えてるんだね。

ラトナさんは、相手を持つイスラームへの負のイメージと自らの日本語能力の限界から、イスラームについて聞かれることを「とても不安」だと語る。それはこれまで問いかけてきた私に対しても抱いていた。私は不意の指摘を笑いでかわそうとするが、ラトナさんは「宗教の話は敏感な話ですので、間違えないようにいつも気になってます」と語りを続け、日本語で正しい説明ができない時は、「何も言わないほうがいい」とまで語っていた。これまでも確認された、「ムスリマであること」を維持するために、相手と距離を置く姿勢の一形態だと思われる。

しかし興味深いのは、言語化せずとも、周囲の学生や教師に対して、イスラームへの正しい理解を自らの行動をもって示そうと日々意識している点である。ラトナさんは周囲の人々が抱いているであろう、メディアによる報道を通じて形成されていくイスラームへの負のイメージを払しょくすべく、密かに「正しい日常行動」を自分に課していた。

ラトナさんは、数年後の卒業を見据えつつ、「両方の

国に関係したビジネスをしたい」と考え懸命に学業に取り組んでいる。「正しい日常行動」への姿勢は、今後ラトナさんが日本に関わっていく中でも絶えず自らに課していくものなのだろう。そしてこの姿勢は、大小の差こそあれ、おそらく敬虔なムスリム留学生に共通するものでもあることは想像に難くない。

7. 考察

高校3年生の時、日本語に興味を持ったラトナさんは、友人2名と日本への留学を果たす。だが、友人がイスラーム教の戒律を軽んじるようになったことから、次第に距離を置くようになる。データ1では、そんな友人を差別化しつつ、聞き手である私に向け、自らが敬虔なムスリマであることを「宣言」しているような語りが見られた。他者を自己と比較し、自己の決意を対話の相手に向けて言語化することで、自らの信仰姿勢を再帰的に確認する姿勢。ラトナさんのこうした姿勢は、本研究での私とのやりとりに限らず、おそらく日常場面で戒律の話題が出るたびに、対話の相手を通じてなされるものなのではないかと考える。

日本ではムスリムのネットワークが皆無のラトナさんであったが、京香さんという先輩と親しくなったことがデータ2で語られる。特定の日本人学生との関係は市嶋(2013)、中野他(2015)では触れられなかった事例であり、強固なムスリム留学生のネットワークの存在を示したこれまでの先行研究と異なる、新たな視点を提示したと言えるだろう。インタビューでは、京香さんがラトナさんにイスラームの宗教的行為を促すことも語られており、京香さんとの出会いは日本での留学生生活を充実させるものとなっていることがわかる。一方、京香さんにとっても、ラトナさんとの出会いは日本語非母語話者に対するインターアクション能力の向上とともに、イスラーム文化への興味や理解を促進させる機会になっていることがうかがえる。

しかしデータ3では、聞き手としての「構え」が少なからず影響を与えつつも、他の学生や他国の留学生とは積極的に交わろうとしない様子が語られた。親密な付き合いは京香さん1名に留め、ネットワークを限定させる姿勢もまた、「ムスリマであること」を保とうとする一形態だと考えられるが、インタビューの相互行為の部分分析の結果、ラトナさんにも他者への関心が潜在していることがわかった。そしてそこには、自身の日本語能力への不安といった個人的要因のみならず、学内の礼拝場所という外的要因の影響も潜んでい

ることが確認された。相互行為を通じて個人の語りに着目したライフストーリーの成果だと言える。

だがそれでは、交流を妨げるものとして機能していた、礼拝場所というイスラーム教徒にのみ限定された空間と非ムスリムとのインターアクションの関係を、日本語教育・留学生教育においてどのように捉えればよいだろうか。

イスラームを「宗教」としてではなく、「異文化」として非ムスリムに教え、理解を深めさせることで、ムスリムが心的負担を感じることなく礼拝できるようになるという考え方は、非ムスリムの行き届いた配慮が効果を上げているようにも見え、イスラーム地域研究者の小村明子も、「異文化」として戒律を認めるそうした傾向を、日本の教育現場でよく見られる現象だと述べている(小村2015)。しかし一方で、小村は、そうした配慮は一種の対症療法に過ぎず、むしろ日本人のイスラームへの理解を表層的、限定的、断片的なものに留めてしまう逆効果も生んでしまうことも指摘する⁶⁾。

ムスリム留学生のために大学側が礼拝場所を設置していることは特筆すべきであり、また現在、多くの大学でその取り組みがなされているのは重要なことである。しかし、本稿の事例や前述の小村の指摘を踏まえ、さらに発展的に考えると、ただ空間として設置するのではなく、非ムスリムの学生にも礼拝場所の存在がイスラーム理解への契機となり、双方の関係性が深まるような配慮も必要なのではないだろうか。無論、ムスリムの多様性という側面を隠蔽させてはならず、礼拝の様子が見えないような場所を用意する必要があるのは言うまでもない。宗教的行為の独自性を異文化事象の一つとして単純に解釈されないようにする意識を持つことも求められるだろう。だが、ラトナさんと京香さんのように相互理解につながる関係が、より多くの日本人学生、または留学生同士に築かれるように、礼拝をするムスリムがいても、周囲が当然のこととして受け入れられるようなスペースの設置や、イスラームへの理解を促進させる正規科目の設置、あるいは学内イベントの実施等も求められる。それはラトナさんの抱えていた日本語能力への不安も、言語や文化の交わりが頻繁に起きる環境下でこそ克服できる部分が大きいと考えるからである。

データ3では、礼拝場所という、ネットワークの広がりや狭まる外的要因により、「ムスリマであること」を維持しようとする姿勢が確認されたが、それは相手からの問いへの応答という場面にも現われていた。それ

が課外活動において小学生に「イスラームこわーい」と言われた出来事が語られたデータ4である。ここでは、そうした体験は既に慣れているとしつつ、相手を小学生というカテゴリー枠に埋めて例外化させることで、「ムスリマであること」を保とうとする姿勢が確認されている。

なお6.4でも触れたが、ここで再び私の「構え」について言及したい。小学生の言動を「問題化」した私は、いわば「にわか専門家」を気取り、初等教育での異文化理解の重要性を共有しようとしつつ、ムスリマとしての矜持を覚醒させようとする。そして多様な交渉形態を持つにもかかわらず、ラトナさんを再び「ムスリマ」という集団に回帰させ、現行の学校教育への対抗軸として掲げようとしていた。データを振り返る過程で気づいた、当事者を置き去りにした、やや独善的とも思える私の「構え」は、冒頭に述べた新聞記者の「予定調和のストーリー」を形成しようとする姿勢と重なるのではないかという問いを突き付けたのである。よってデータ4は、聞き取り姿勢の在り方、学習者への接し方について私に省察を迫るものとなっている。同時に、この私とラトナさんとのやりとりは、私と同様に日本語教育・留学生教育の場でムスリム留学生に日々関わっている読み手に遡及体験をもたらす、ムスリムとしての立ち位置の多様性を常に意識することの必要性を確認させる素材にもなったのではないだろうか。

データ4において、イスラームに対する小学生の言動に寛容な態度を示したラトナさんであるが、続くデータ5では、逆に、教師の教える内容について誤りを直接的に指摘した経験が語られていた。ここでラトナさんが、「ムスリマであること」を保つべく、データ4のように対話の相手を何らかのカテゴリーで括ろうとしなかったのはなぜだろうか。考えられるのは、誤解を向けられた対象がラトナさん本人であるかどうかという点である。つまりデータ5においては、教師が持つイスラームについての誤った認識が、ラトナさん本人ではなく、不特定多数の他者（この場合は受講している大学生）に流布されそうな場合であったがゆえに、日本語能力への自信のなさで臆することなく、誤りを正そうとしたのではないだろうか。さらにその行為は、「今も大学で会うと話しますね」と語っているように、結果的に当該教師との親密な関係構築の可能性にもつながっている。ここから、ムスリマであることを維持すべく、相手と距離を置くことによって自己制御しようとする姿勢だけは、関係の親密さにはつながらないということ

が言えるだろう。

最後に示したデータ6は、日本語による説明の困難さを感じているというラトナさんが、別の日常の文脈において、非言語行動を通じてムスリムへの理解を密かに胸に宿していることを語ったものである。これも語り手と聞き手の相互行為による語りの表れであり、今回の調査を通じた私への語りを経ることでラトナさんも決意を新たにしていっただと思われる。無論、「良きムスリマ」を常に「演じ」なければならぬほどの緊張感がラトナさんの日常を覆っているという側面は看過してはならない。だからこそ、先に述べたムスリムの宗教的行為を日常の風景として受け入れられるような学内の教育環境の設定の必要性がここでも導き出されるが、「正しい日常行動」を通じて積極的にイスラームのイメージを高めようとするラトナさんは、今後も留学生生活、さらには将来に向けて、相互行為の相手にイスラームへの理解を促しつつ、「ムスリマである」自己の存在を絶えず確認していくに違いない。

8. おわりに

中野・田中（2017）は、日本人学生を対象に、ムスリム留学生との文化摩擦場面を想定した教室活動を行い、ロールプレイを通じて宗教上の話題は禁忌ではないという気づきを得た日本人学生数名の報告を示している。これを踏まえると、異文化に接する態度の涵養には、単なる配慮ではなく、双方の関係性が深まるよう具体的な他者とのインターアクション経験が不可欠であり、そのための教育環境の設定や正規科目としての設置等が求められることが改めて導き出される。

本研究の結果に依拠すれば、それは単に礼拝場所やハラールに配慮した食べ物等を提供するだけではなく、日本人学生、留学生を問わずイスラームの宗教的行為が全学的に日常の風景になることで多様な価値観が現れ、粘り強く意見を交わすインターアクションの機会を通じて他者理解を希求していく言語活動の空間である。それこそが、近年叫ばれる学内のグローバル化に求められるのであり、ひいては異なる文化的背景を持つ国家、民族、あるいは個人間で展開される現代社会の諸課題を、自らの問題として捉える倫理的態度の涵養につながっていくのだと考える。

ライフストーリー・インタビューを用いて、「ムスリマ」というアイデンティティの一要素に着目した本研究では、「ムスリマであること」を保とうとしていた留学生1名の日常的実践から、ネットワークの限定や自

己と他者を差別化する姿勢、相手をカテゴリー化しつつも、時に言語・非言語行動をもってイスラームへの理解を周囲に促す等、その多様な実態が各事例で明らかになった。ここから、ムスリム留学生をめぐる言説への新しいストーリーの提供ができたと言えるだろう。だが教育に関する具体的な示唆はさらに検討が必要であり、個人の实態は、当然、より多様であると思われる。今後は、引き続き個々の事例に丁寧にあたりつつ、教育現場に携わる実践研究者として考察を深めていくことを課題としたい。

注

- ①日本人ムスリムに対する誤解記事をめぐる情報については、下記を参照した。
<http://bylines.news.yahoo.co.jp/yanaihito/fumi/20160225-00054728/>(2016年11月24日閲覧)。
- ②小杉(2017)は、留学生教育学会主催2016年度留学生担当教職員分科会で、ムスリム留学生の世代間変化について触れている。小杉はそこで、異文化適応に柔軟なエリート層が多かった以前と比べ、近年は適応能力が低い留学生が増え、加えてムスリムの発言権が影響力を帯びている状況を盾に、自分のやり方を押し付ける傾向も無視できないとするムスリム留学生側の問題を指摘している。
- ③インドネシアの高等学校には、イスラーム系高校と他の宗教信仰者も含む一般高校がある。いずれも宗教教育が学校教育の基本となっており、イスラーム系高校では年間授業数の2割が、また一般高校でも週2回の宗教教育が与えられる。詳細は堀部(2015)を参照。
- ④本稿で詳細の都合上言及しなかったが、このことはハラルの扱いについても同様であろう。例えば八木(2015)は、本来個々の事情に応じるべきハラルを、ビジネスの対象として単純化してしまう近年の傾向の問題に触れている。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、ムスリムをめぐる国内の動向やイスラームの宗教的行為への向き合い方等について、イスラーム思想研究者である石田友梨氏から多くの示唆をいただきました。ここにお礼申し上げます。

引用文献

市嶋典子(2013)「在日ムスリム留学生の宗教的葛藤と留学生支援」『言語文化教育研究会2013年度研究集会大会発表予稿集』, 109-114.

- 岸田由美(2011)「ムスリム留学生の宗教的ニーズへの対応-現状と課題-」『留学生交流・指導研究』13巻, 35-43.
- 岸政彦(2016)「第3章 生活史」『質的社会調査の方法-他者の合理性の理解社会学』岸政彦・石岡丈昇・丸山里美著, 有斐閣, 155-238.
- 小杉麻李亜(2017)「滞日ムスリム留学生・家族の生活と宗教的ニーズ」2016年度留学生教育学会主催「留学生担当教職員分科会」における企画講演録(2017年3月10日)より。
- 小村明子(2015)『日本とイスラームが出会うとき』現代書館。
- 桜井厚(2002)『インタビューの社会学-ライフストーリーの聞き方』せりか書房。
- 桜井厚(2012)『ライフストーリー論』現代社会学ライブラリー7, 弘文堂。
- 桜井厚・西倉実季(2017)「インタビュー 対話的構築主義との対話 ライフストーリー研究の展望」『現代思想』3月号, vol45-6, 青土社, 60-84.
- 下峠哲郎(2003)「文化摩擦に関する研究ノート-来日ムスリム留学生のムスリム・アイデンティティに焦点を当てて」『淑徳大学大学院研究紀要』(10), 91-110.
- 田中京子・ストラーム ステファン(2013)「大学による多文化環境整備-ムスリム学生との協働の視点から-」ウェブマガジン『留学交流』7, Vol.28, 1-9.
http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2013/_icsFiles/afiedfile/2015/11/19/201307tanakakyo ko.pdf(2016年11月24日閲覧)。
- 中野祥子・奥西有理・田中共子(2015)「在日ムスリム留学生の社会生活上の困難」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第39号, 137-151.
- 中野祥子・田中共子(2017)「日本人学生を対象としたムスリム留学生との異文化交流のための異文化間教育-文化摩擦場面のロールプレイから異文化間ソーシャルスキルへ-」『異文化間教育学会第38回大会発表予稿集』, 200-201.
- 服部美奈(2015)「イスラーム的な人間形成」『ムスリマを育てる-インドネシアの女子教育(イスラームを知る20)』山川出版社, pp.7-27.
- 八木久美子(2015)『慈悲深き神の食卓-イスラームを「食」からみる-』東京外国語大学出版会。